京都大学地域研究統合情報センター共同研究ワークショッププログラム

＜地域の知＞の可能性―地域研究の視点から―

日　時　：　2011年4月23日（土）　13時30分　～　18時00分

場　所　：　稲盛財団記念館大会議室（3階・333号室）

趣　　旨

地域研究者にとって＜地域の知＞は必然である。先ず以て地域は人をふくむ生命や組織の関係性の総体である。いかなる研究対象でも、そこに分け入る地域研究者は、様々な立場の人びととの相互作用を通じて分析枠組を鋳直し議論の前提を見直して、その「解」へ至る過程を経験する。また、地域研究者は異なる地域の研究や時間軸を通して新たな地域像を獲得する。ある地域が複数の地域と比較されて異なる相貌を顕す。そうした営みを通じてある地域にまつろう閉鎖系のイメージや研究の視点、課題解決方策は刷新される。これは地域研究の可能性であるとともに、その核心となる知的営みは地域の文脈をなす現場において研究者が蓄積する経験的知識と不可分であり、常に限定的であることを教える。

情報学は地域が保蔵する史資料群に加え、地域研究の成果を収集し蓄積し共有化することに貢献する。さらに、これらの資料や知見の計量的処理を通じて情報の再構築を図る。限定的なデータから複数地域を繋ぐ主題や課題を発見したり、既存の資料に新たに解釈を与えたりする可能性を持つ。もっとも、地域研究者が地域での経験を介してその知見を得るように、地域についての情報学には媒介者としての情報学者と地域研究者の共同が不可欠となる。

地域研究統合情報センターは特定地域の実証的研究を基軸に、地域間の繋がりの理解や今日の喫緊の課題にとりくむ「相関型地域研究」と、地域研究と情報学を統合した「地域情報学」を両輪として新たな地域研究を推進している。平成22年度に発足した「地域情報学プロジェクト」では、資源共有化システムと各種データベースを基盤として、個別研究課題に対応する統合型データベース、地域研究者が経験的に実践してきた資料の発掘収集、解釈の過程を情報学的手法によって最適化するシステムの構築を試みており、それらを軸に日本学術会議「学術の大型研究計画」にも他大学研究機関と共同で参画しようとしている。本ワークショップでは、情報としての＜地域の知＞がいかに生成し表出するかを現場から問い直すことによって地域のより動態的な理解への可能性を探りつつ、そうした知見を統合し広汎に共有するための技術や制度を展望する。

プログラム

13:30-13:40	趣　旨 林　行夫　（地域研センター長）
13:40-14:10	インドの家族再考－相関型地域研究の立場から 報告者：　押川　文子　（地域研）
14:10-14:40	Multi Site Comparative Area Studies:Frictions between Methods and Local Meaning. 報告者：　Wil de Jong　（地域研）
14:40-15:10	「写真」をフィールドワークする－図画像データベースの構築と利用 報告者：　貴志　俊彦　（地域研）
15:10-15:30	休　憩
15:30-16:00	相関型地域研究を支援する地域研究情報基盤 報告者：　原　正一郎　（地域研）
16:00-16:30	＜宗教＞をどう測量るか－総括にかえて 報告者：　林　行夫　（地域研）
16:30-18:00	討　論 ディスカッサント　岩下　明裕　（北海道大学） 岡部　篤行　（青山学院大学） 総合討論
18:30-20:00	懇　親　会　　会場：3階中会議室（332号室）

（問合せ先　：　共同利用・プロジェクト構想委員会　project@cias.kyoto-u.ac.jp）